

# 荒川鉱山と鉱山街の発展

## 藩政時代の荒川鉱山

秋田藩における江戸時代後期（1818～1830）の鉱山数は408で、荒川鉱山があつた協和地域は49（うち金山2、銀山24、銅山8、鉛山15）という記録が残っています。協和地域の主な鉱山には、荒川銀山、畠銀山、尾改沢銅山（のちの荒川鉱山）、亀山森銅山、宮沢銀山、三門沢川前銀山がありました。

荒川鉱山は、元禄13（1700）年に久保田の商人であつた川村庄右衛門が発見し、その後、平右衛門、井上作兵衛へと経営が移り、元文3（1738）年から寛保3（1743）年には、秋田藩直営となりましたが、その後の藩政時代の鉱山経営については不明です。

## 瀬川安五郎による開発

明治に入ると、明治4（1871）年6月に境の唐松神社宮司であつた物部長之鶴飼が鉱山経営をはじめました。物部長之は荒川鉱山のほかにも、鍋倉、日三市、湯田、土畑などの鉱山を経営していましたが、排水に多額の費用がかかり明治6年に破綻、鉱区は公売にかけられました。同年に古河市兵衛・岡田平蔵などによる

鉱業組合に引き継がれ、翌年には小野組へ経営が移りますが、小野組も破産し、荒川鉱山は政府に没収されます。秋田県仮官業、鉱山寮所属を経て、盛岡の商人・瀬川安五郎に払い下げられました。瀬川は、人員を243人に増員して開発に着手、1か月後にはのちに主力となる<sup>うがいさわ</sup>嗽沢の大鉱脈を発見します。坑夫が増え、居住戸数が増えると、瀬川は子どもたちの教育のために大盛学校（のちの大盛尋常小学校）を設置、そのほか病院や寺院の設置なども手がけ、荒川は鉱山街として発展していきました。

## 三菱合資会社への売却と荒川鉱山の発展

溶鉱炉の火災や銅価格の下落などにより経営難になると、瀬川は明治29（1896）年に三菱合資会社（のちの三菱鉱山株式会社）に経営していた多くの鉱山を売却します。三菱の資本が入った荒川鉱山は、電力を導入して機械化をはかり、明治37（1904）年にはすでに運転していた馬車トロッコを開通した奥羽本線境駅まで延長するなど、鉱山の経営方法を一新しました。

従業員も2000名を超え児童数も816名を数えるなど、昭和3（1928）年頃には産出量も鉱山街としてもピークを迎えます。しかし、昭和10年頃から経営が縮小されると、昭和15（1940）年、荒川鉱山は休山となりました。



**秋田県羽後国仙北郡荒川村 鉦山嗽沢坑内実測裁面図**

尺度二千百分の一

荒川鉦山の嗽沢坑内断面図。大正 5 年に作成され、大正 14 年まで加筆していったもの。大正以前には縦穴の坑道しか見られず、本格的に採鉦されたのは大正以降だとわかる。



**半鐘 （大仙市指定文化財）**

荒川鉦山から採掘された銅でできた半鐘。明治 27 年に経営者であった瀬川安五郎が峰吉川村の消防組創立を記念して寄贈したもの。（市所蔵）

# 荒川鉱山年表

元禄 13 (1700) 年	久保田の商人・川村庄右衛門が荒川鉱山を発見する
元文 3年 ~ 寛保 3年 (1738~1743)	秋田藩の直山 (藩直営) となる
明治 4 (1871) 年	唐松神社宮司・物部長之鵜飼が鉱山を稼業
6 (1873) 年	古河市兵衛・岡田平蔵などが鉱業組合を結成し運営する
7 (1874) 年	小野組に引き継がれるも破綻し、秋田県仮官業という形で経営継続
8 (1875) 年	鉱山寮院内支庁分局の所属となる
9 (1876) 年	盛岡の商人・瀬川安五郎へ払い下げ 同年に嗽沢に大鉱脈を発見
11 (1878) 年	瀬川安五郎が私立大盛学校を設置 (のちの大盛尋常小学校)
29 (1896) 年	三菱合資会社へ売却される
30 (1897) 年	鉱山内に水力発電所が建設される
37 (1904) 年	荒川鉱山ー羽後境駅に馬車トロッコ全通
大正 1 (1912) 年	従業員が2000人を超える
13 (1924) 年	嗽沢坑の18番坑道と運搬坑道以下269メートルの深さまで採掘
昭和 3 (1928) 年	大盛尋常小学校の児童数816名
5 (1930) 年	銅の生産 (年間) 1894トン記録
10 (1935) 年	三菱鉱業株式会社尾去沢鉱業所荒川支所に縮小される
15 (1940) 年	休山となる



## 荒川鉾山の位置図



鉾山遺構が残る現在の荒川鉾山  
(だいせん大曲フィルムコミッション HP からの転載)